

を広げようとするグループに分かれ、それぞれがそれぞれの主張に従って、ナオジョテを行っているといたった状況にある。そして彼らはいずれも、それぞれの主張の根拠を、彼らの歴史や聖典『アヴェスター』に求めている。しかし彼らの論争は平行線のままである。

このような状況の原因と考えられるのは、彼らパールシーの歴史観の欠如である。パールシーがパールシーの歴史を語る時、ササン朝滅亡後から十六世紀に西洋列強がインドにやってくるまでの出来事がほとんど出てこない。またあまたのナオジョテ指南書にも、歴史的な考察は見られない。しかしナオジョテとは、ゾロアスター教の教義に基づいて直ちに成立したものではなく、長い歴史の中で、各々の時代的狀況を通して、その結果、完成されてきた伝統文化である。そしてナオジョテを通して、そのような歴史的な流れに繋がっていることができるのは、パールシーの子孫のみである。つまりナオジョテとはゾロアスター教への入信を誓うだけでなく、パールシーの先祖とのつながり、あるいは自分のルーツを振り返るといった意義があるのである。

第二部会

国立大学神学部廃止とイタリア宗教史学

江川 純 一

ファシスト政権によってイタリア初の宗教史学講座が創設されたのは一九二三年である。そのちょうど半世紀前の一八七三年、イタリア王国議会は国立大学の神学部廃止を決定した。本発表では、五〇年の間に、いかなる環境のなかで何が用意されたかについて概観したい。

イタリア王国には一七の王立大学が存在したが、そのうちの一一大学がいわゆる総合大学で、神学部を備えていた。歴代の公教育大臣の名を取って「シャローヤッコッレンティ法」と呼ばれる法律の内容とは、国立大学の神学部を廃止し、神学部で行われてきた教育を文学部に移し新カリキュラムにするというものであった。ナポリ大学やローマ大学などで実施されるが、神学部の教員がそのまま文学部に移されたにすぎず、結果として、神学の研究は弱められ、また、新しいディシプリンが即座に生まれることもなかった。国立大学の神学部廃止は王国政府と教皇庁との反目のなかで決定されたものであり、背景にはイタリアを覆っていたカトリックへの無関心が存在した。

一九一〇年代になり、研究者達は、各自の関心に従って個別の対象を研究している場合でさえ、「宗教」という概念を意識

するようになった。この変化をもたらしたのは「モデルニズモ」と「ストリチズモ」の成熟である。「モデルニズモ」、「ストリチズモ」と片仮名にする理由は、対象をイタリアのみに限定したためである。モデルニズモとはイタリアにおける一九世紀後半から二〇世紀前半にかけてのカトリックの改革運動を指す。一方、ストリチズモとはヴィーコをその端緒に据えることで自らの「正統性」、「正当性」を主張するイタリア独特の思想傾向のことであり、所謂「歴史還元主義的研究」を指す。イタリアのストリチズモの代表はクローチエであり、彼がヴィーコを「ストリチスタ(歴史主義者)」にした。

興味深い事例が存在する。キリスト教史のブオナイウティ、トウルキ、フラカッシーニ、エジプト学のアリーナ、古典宗教のペスタロッツァ、そして宗教史学のペッタッツォーニは一九一六年に『宗教学雑誌 (*Rivista della Scienza delle Religioni*)』という雑誌の刊行を始める。だが、歴史的・批評的立場に立った同誌は教皇庁検邪聖省の検閲対象となり、同年六月に禁書処分を受け、二巻で廃刊となる。ブオナイウティは聖職停止を解除するため、モデルニズモを捨てることを決め、教皇庁への態度を硬化させることはなかった。トウルキは、カトリック当局の同意を得た新しい雑誌を始めたが、ペッタッツォーニは、科学はすべての宗教に開かれていなければならないとしてこれに加わらなかった。

モデルニズモとストリチズモを用意したのは自由主義という流れであったが、誤解を恐れずに図式化するなら、モデルニズモは歴史よりも宗教を優先した。つまりヴァチカンとの関係を

重視したということである。ブオナイウティやトウルキの態度がそれを示している。一方、ストリチズモは宗教よりも歴史を優先した。クローチエのように宗教の重要性を認めない立場がアカデミズムを支配したのである。これは当時のイタリアに蔓延していた宗教的無関心とも深く関係する。発表者は、両者の均衡と調停を目指したものがイタリアの宗教史学だと捉えている。つまり、宗教の重要性を主張しつつ、ヴァチカンに寄りかからない態度のことである。その代表であるペッタッツォーニは『宗教学雑誌』の一件により、リベラルなキリスト教研究者からも一歩距離を置くようになり、孤立する。彼に救いの手をさしのべるのはファシズムである。

折口信夫と大川周明

——民俗学と宗教学の起源をめぐって——

安藤 礼二

折口信夫(一八八七—一九五三)と大川周明(一八八六—一九五七)は、この列島でかたちとなった民俗学と宗教学という二つの学の起源に位置する人物である。二人がそれらの学を選び取るに至った背景には、おそらくは同一の思想的な潮流が存在していたと思われる。つまり、折口信夫と大川周明、あるいは民俗学と宗教学は、起源を共有しているのである。その事実を最もあからさまに示すのは、折口にとっては、若き折口に諸宗教の総合と統一を示唆し夭折した藤無染という一人の僧侶